

『風葉和歌集』所収散逸物語に見える「知られざる
子」「知られざる父」：『御手洗川』『藤の裏葉』
『なでしこ』

宮崎，裕子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8951>

出版情報：文献探究. 44, pp.13-20, 2006-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

『風葉和歌集』 所収散逸物語に見える「知られざる子」「知られざる父」

『御手洗川』『藤の裏葉』『なでしこ』

宮崎裕子

一

様々な男女の悲恋や密やかな逢瀬を好んで描く中世王朝物語には、その結果として、通常の親子関係を持ってない父子が多く登場することになる。

特に「不義の子」は頻繁に登場し、父母の密通によって誕生したため実父の存在を知らず、もしくは実父に存在を知られず、実の父と通常の親子関係を築くことができなかった「不義の子」は、最終的に当事者である父と子の双方が親子関係を認識し得たものも含めて、七作品中に十二人登場している(注1)。

また、忍びやかな仲であった男女が何らかの事情で離れ離れになり、女は男と隔たった後に出産、産まれた子供はその父に存在を知られないまま成長するという、『苔の衣』『石清水物語』などのような内容を持つ物語も現存する。

このような、父に「知られざる子」、子に「知られざる父」

の物語は、散逸した物語群の中にも含まれていたようで、『風葉和歌集』所収の散逸物語『御手洗川』『藤の裏葉』『なでしこ』にその片鱗を見出すことが出来る。

本稿では、これら三つの物語の内容について、『風葉和歌集』に収録された歌をもとにして、父子が隔たらざるを得なかった物語内の事情を推測した(注2)。

二

1 『御手洗川』 四首 / 『風葉和歌集』 所収歌数。以下同
巻第二春下78

南殿の桜の盛りに、春宮・二のみこなど、花折りてとのたまはせけるに、奉り侍りけるを、帝、吹き寄る風も恨めしきに情なしや、とのたまはせければ、奏し侍

りける

御手洗川の内大臣

行方なき風だに散らす花なれば君がためには手折らざらめ
や

巻第七神祇 449

人知れず我が標刺しし榊葉を折らんといかで思ひ寄るらん
これは、御手洗川の内大臣、齋院のいまだ父みかどに
も知られきこえ給はざりけるころ、ほのかに見きこえ
て、心にかかりて寝たる夜、賀茂よりとて、榊に付け
たる文に書かれたりけるとなん。

巻第七神祇 462

賀茂のいつきいまだ変り侍らざりける時、花の盛りに
内大臣詣でて、「散らでも花の千代を経よかし」と申
し侍りければ 御手洗川の内大臣

榊葉も花の匂ひもたぐひなき折る人からに千代も経ぬべし

巻第七神祇 484

影並べすまむことこそ難からめ入り方近き山の端の月
これも石山の観音、御手洗川の内大臣の夢に告げ給ひ
けるとなん。

齋院は、何らかの事情で父帝に存在を知られぬまま成長して
いた。そして、内大臣は、父帝の皇女と認められる以前の彼女
を見初め、それを神に咎められる。齋院が皇女と認められた後
も、内大臣は彼女に思いを寄せ続けるが、石山の観音からも、
その恋が叶うことはないという夢告を受ける。『風葉和歌集』
の詞書で「齋院」と呼ばれていることから、齋院は物語の終末

まで齋院の地位にあつたことが窺えるので、石山観音の夢告通
り、内大臣の恋は成就しなかつたのだらう。

449番歌の直前に配置された448番歌は、『狭衣物語』
の堀川大殿に賀茂の神が源氏の宮の入内中止を求めた夢告の歌
である。

神代より標引きはへし榊葉を我よりほかにたれか折るべき

これは、狭衣の源氏の宮、内へ奉らんとし給ひけるに、
堀川院の御夢に、賀茂よりとて侍りけるとなん。

(巻第七神祇)

448番歌と449番歌はどちらも、賀茂の神からの夢告によ
り女性が齋院となるべき人物であることを知らされるといふ共
通点があり、小木喬氏は『御手洗川』の内容について、

内大臣が齋院に恋をしたが、ついに叶わなかつたといふ
物語であろう。これは、おそらく、狭衣と源氏宮との関係
を模したものと思われる。(『散逸物語の研究 平安・鎌倉
時代編』「笠間書院、一九七三年」802頁)

と想定されている。

また、462番歌の直後に並べられているのも、『狭衣物語』
から採られた源氏の宮と狭衣とに関わる歌である。

みかど、ただ人におはしける時、祭の日、御社にて、

都には音なきほととぎす、御垣のわたりには声慣れにけるを聞かせ給ひて、「賀茂の岩垣尋ね来にけり」とのたまはせけるに
狭衣の斎院の女別当

語らばは神も聞きてむほととぎす思はむ限り声な惜しみそ
(巻第七神祇463)

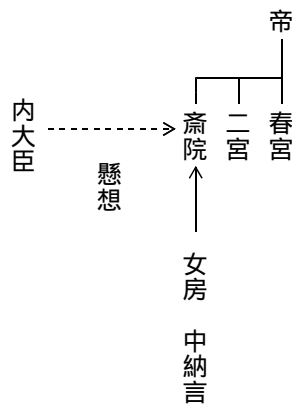
この463番歌の詠み手である女別当は、狭衣の源氏の宮に對する思いに氣付いておらず、狭衣の

思ふことなるともなしにほととぎす神の斎垣にたづね来にけり
(巻三 日本古典文学大系306頁)

という独詠を耳にして、「語らば……」と何気なく応じている。仮に、『風葉和歌集』が『狭衣物語』と『御手洗川』との類似の場面を並べているのだとすれば、『御手洗川』の内大臣は、「ほのかに見」た女性が斎院となつた後にも思いを寄せ続け、賀茂に詣でた際に斎院への恋情を秘めた歌を詠むが、そうした内大臣の心を知らない中納言は、神に仕える斎院を讃える歌を返したのであろうか。

その姿を見た内大臣の「心にかかり」、それを賀茂の神が咎めるに至つたのであるから、斎院は、449番歌が詠まれた時点ですでに成人していた可能性が高い。父親と離れていた子供が素性を公に出来ぬまま成年に達する例は、大臣家の娘なら『源氏物語』の玉鬘を筆頭に、『石清水物語』の木幡の姫君、『我身にたどる姫君』の我身姫などが挙げられるが、皇女がそのよう

にして育つ例は現存する王朝物語には見当たらない。『御手洗川』が影響を受けていると思われる『狭衣物語』では、飛鳥井女君腹の姫君が紆余曲折の末に父狭衣と巡り会つて父帝の御代の一品の宮となる。この姫君が父に存在を知られて見出されたのは幼少期のことではあるが、『御手洗川』の斎院は、『狭衣物語』の源氏の宮のみならず、飛鳥井女君腹の姫君のイメージをも取り込んで造型された人物なのかもしれない。
78の詞書に登場する「春宮・二のみこ」は、これを帝の子とすれば、次のような人物関係が想定される。



では、斎院が長じるまで父帝に存在を知られなかったのは、いかなる事情によるのであろうか。当然のことながら、それは、後述の『なでしこ』の場合と同じく、父帝と斎院の母との関係の在り様に起因すると考えられる。帝と離れた後に斎院を産出したのである母は、一体どのような人物であったのか。帝に對する斎院の母の立場が、斎院が父帝に存在すら知られずにいた事情に大きく関わっているはずであるが、斎院の母の立場に

ついで想定すれば、A 帝の後妃、B 宮中の女官・女房、C 宮廷の外で帝に見初められた女性、以上の三つのケースが考えられようか。

A・帝の後妃

齋院の母が后妃であったとは考え難い。彼女が女御などという身分であったのなら、帝の前から姿を消す可能性は低いからだ。仮に、何かの事情で宮中に居辛くなり、世を憚って身を隠したのだとしても、皇女の誕生を長期間に亘って公表しないのは不審である。

B・宮中の女官・女房

齋院の母が宮中に仕える女官として帝の寵を受けていたのなら、彼女は尚侍になれる程の権門貴族の出ではなく、その寵愛ぶりが後宮の秩序を乱す程になって世人の批判を被り、居たまれなくなつて身を隠したのかもしれない。あるいは、后妃に仕える女房であったが、帝の寵愛を受けたことが原因で宮中に居辛くなり、失踪した後に齋院を産んだとも考えられる。

C・宮廷の外で帝に見初められた女性

齋院の母と帝とが宮廷の外で出会つたのなら、その時期はおそらく、帝が東宮位にもつかない頃であろう。

『木幡の時雨』の帝は、式部卿宮時代に逢瀬を持った女性(実は、その妹)を東宮となつてから入内させ、生まれていた子供も参内させて親王にしている。これに類似の展開で、帝が東宮

でもなく比較的気軽に宮廷外を歩くことが出来た頃に齋院の母と出会い、何らかの事情で二人は再会を果たせないままに年月が過ぎ、子供の誕生さえ知られずにいたのだろうか。

あるいは、前述のように齋院の人物造型に『狭衣物語』の飛鳥井女君腹の姫君の影響があるのなら、齋院の母と帝との関係は、『狭衣物語』の飛鳥井女君と狭衣との関係に類似のもので、齋院の母は飛鳥井女君のような悲運を背負われた女性だったのかもしれない。

2 『藤の裏葉』 一首

巻第十六雑一 1190

忍びたる女のもとに、ちこの出できて侍りけるを、人
のものに聞きて遣はしける 藤の裏葉の右衛門督
人知れず思ひこそやれなでしこのよそに標結ふ花の姿を

詞書から判るのは、右衛門督は忍んで通つた女性との間に子供が誕生するものの、その子供は他人の子として育てられているというのみである。「忍びたる女」が誰なのか、右衛門督は「ちこ」と親子の名乗りを遂げることができたのか、いずれも手掛がない。

「右衛門督」が忍んで通つた女性との間に子をもつけ、その子供が他人の子として育てられるというのは、『源氏物語』の柏木をモデルにした内容であろうか。それならば、「忍びたる女」は人妻で、右衛門督との密通による不義の子を、夫との間

に出来た子だと取り繕ったのか。あるいは、右衛門督が忍んで通っていた女性を別の男性が妻としたものか。

現存する中世王朝物語では原則として、不義の子の処遇が父系の血統による一定の規制に基づいてなされており、「不義の子」であるという事実が表向きの父に露顕しない、あるいは露見しても容認されて表向きの父の子供としてその家にとどまることができるとは、不義の子の表向きの父と実父とが父系を介した近親者である場合に限られている。また、表向きの父が帝であった場合は、たとえ実父と帝とが父系を介した血縁者であるとしても、実父の身分が臣下ならば、不義の子と表向きの父との親子関係は何らかの形で破綻を来すことになる(注³)。

この規制に照らし合わせると、「ちこ」の表向きの父が右衛門督の父系を介した近親者であれば、「ちこ」の実父が右衛門督であるという事実は発覚しない、あるいは、発覚しても容認され、「ちこ」は表向きの父の子として養育され続けたのかも知れない。表向きの父が右衛門督と父系を介した近親関係にならない場合、表向きの父が帝である場合は、何らかの形で「ちこ」と表向きの父との関係が破綻し、「ちこ」は表向きの父の子として遇され続けなかった可能性が高い。

ちなみに、『風葉和歌集』巻第十六には、「なでしこ」の歌が三首並べられており、その一首目は『源氏物語』から採録されたもので、訪れの遠のいた頭中将へ夕顔が「せめて子供のこと忘れなれど欲しい」と訴えた歌である。

久しう消息もし侍らぬ男に、幼き子などもありければ、

なでしこの花を折りてやるとて 源氏の夕顔の君

山がつの垣ほ荒るとも折々にあはれはかけよなでしこの露

(巻第十六雑一 1189)

この後に、『藤の裏葉』の1190番歌、後に掲げる『なでしこ』の1191番歌と続き、「なでしこ」が詠み込まれた1189〜1191番歌は全て、何らかの事情で父と子が離れているという内容を持つものである。

3 『なでしこ』 一首

巻第十六雑一 1191

なでしこの大夫父の大将に知られ侍らざりけるころ、
ただかくといひてんと内侍のかみにのたまはせてよま
せ給ひける 　　なでしこの院の御歌

なでしこを思ひ出づらん草むらに露かかりとも知らせてし
がな

詞書によると、なでしこの大夫は、父親にその存在、もしくは所在を知られていない時期があった。「なでしこ」の歌を詠んだ院が、尚侍を介して、大夫のことを父大将に知らせたのである。

その後、大夫は父大将のもとで元服し、大将の子息として官位を得たのであろうから、大夫が父親と離れていたのは幼少期のことと思われる。

この物語の題名については、

題名の由来は植物名「ナデシコ」に「撫でし子」（愛児）を掛ける歌語によったもの。別れ別れの父と子の巡り合いをモチーフとするらしい当物語の内容を象徴したものが。

（『中世王朝物語・御伽草子事典』勉誠社、二〇〇二年）
586頁

という指摘がある。

幼くして父との巡り合いを果たした大夫の成人後の活躍を『なでしこ』物語は描いていたのか、あるいは、「大将の子息は元服して大夫になった」と大団円で語られただけなのか。「父と子の巡り合い」に主眼が置かれていたのであれば後者であるが、残存する一首の歌のみでは判断できない。

では、幼少期、父親にその存在、もしくは所在を知られずにいたという大夫の出生には、いかなる事情があるのだろうか。それは、前述の『御手洗川』の場合と同様に、大夫の母と大将との関係の在り方に起因するものと思われるが、詞書に全く登場していない大夫の母は、一体どのような立場の女性であったのか。

大夫の母と大将との間柄を院が承知していたのだから、彼女は院に近い人物なのだと推測することができ、小木喬氏は、彼女が内親王であった可能性を指摘された（同氏著前掲書）。また、神野藤昭夫氏は、

大将と院には、女をばさんでのしのびね型の三角関係を想定しうる。帝は、大将の子を宿した女を寵愛することになったか。『しのびね物語』では、男の舅から追われた女が身を寄せたのは、宮中の内侍のもとであった。（『散佚物語事典 鎌倉時代物語編』、『体系物語文学史 第五巻』有精堂、一九九一年 所収 408頁）

と、大夫を身籠もっている女性を院が寵愛した『しのびね』型の内容を想定されている。

その他の可能性として、大夫の母は院に近い女性であり、かつ、大将との仲を公然としたものにてできる立場 女官や后妃に仕える女房 にはない人物、つまり、后妃であったとも考えられる。

以上を踏まえると、『なでしこ』の大夫誕生に関わる物語内容については、A 『しのびね型』の物語、B 大夫の母は内親王、C 后妃と大将との密通による大夫の誕生、という三つのケースが想定されよう。

A 『しのびね型』の物語

大夫の母は尚侍の縁者で、大夫を身籠もったまま大将の前から姿を消した。その後、宮中の尚侍の許へ身を寄せ、そこで在位当時の院の目にとまり、帝寵を受ける身となる。彼女が大将との間に男児をもうけていると知った院は、尚侍を介して子供の存在を大将に告げ、子供は父大将に引き取られた。

ただし、尚侍が大夫の母の縁者ならば、院に命ぜられなくと

も、自ら大夫の誕生を大将に知らせるはずである。また、尚侍は大夫の母の縁者ではなく、大夫の母の参内は尚侍と無関係であつたとすれば、院が大将への伝言を尚侍に託すのは、やや不自然なようである。

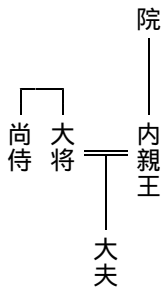
B・大夫の母は内親王

『今とりかへばや』の女東宮は秘密裏に男児を出産し、その子供は父親である男君が引き取つて養育した。これと同様に、『なでしこ』でも内親王が大将の子供を密かに出産したのかもれない。

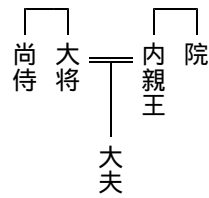
その出産が公表されるべきではないものであれば、院から大将への伝言を託された尚侍は、公人としてではなく私人としての立場で大将に事情を告げたと考えられ、彼女は大将の姉妹などに当たる近親者である可能性が高い。

『今とりかへばや』では、女東宮の父院も兄である帝も、女東宮の出産を知らされずにいたのだが、『なでしこ』では、内親王の父 系図1、あるいは兄弟 系図2 である院が大夫の処遇に関して積極的に動いたことになる。

系図1



系図2



C・后妃と大将との密通による大夫の誕生

大夫の母が院の後妃であつたのなら、彼女の配偶者である院が不義の子の存在を大将に知らせるのは不自然なので、彼女の配偶者は院とは別人であろう。

この場合、后妃と大将との密通による大夫の誕生を院が知つており、院の裁量によって大夫は大将の手許に引き取られたようなので、この院は、后妃の父、もしくは兄弟だと考えられ、Bと同様に大夫の母は内親王と想定される。

三

『風葉和歌集』の詞書をざっと見渡しただけでも、多くの物語に男と女の密やかな恋が描かれていたと判る。現存する中世王朝物語には「密通」とそれによって誕生する「不義の子」がセットになって登場することが多いのだが、ここに取り上げた三つの物語の中で、「不義の子」である可能性が高いのは、『藤

の裏葉』の「ちこ」だけのようである。『風葉和歌集』には密通する男女の交わした歌は数多く残されているが、その結果誕生した子供の姿はとどめられていないのであろうか。それとも、散逸した物語においては、「不義の子」の登場そのものが少なかったのであろうか。

離れ離れになっていた父子が紆余曲折を経て邂逅する有様を描いたものが散逸した物語の中にどれ程含まれていたのかは不明だが、『風葉和歌集』で確認できるのは三作品のみである。その中でも『御手洗川』の449番歌の詞書は、皇女が父帝に存在を知られないまま成人するという現存する作品群には見られない目新しい物語展開を示唆しており、父と子の物語に様々なバリエーションが存在していた可能性を窺うことができる。

注

- (1) 中世王朝物語に登場する不義の子と実父・表向きの父との関係については、拙稿「中世王朝物語における「不義の子」の処遇 『在明の別』を手掛かりとして」(『語文研究』百・百一号、二〇〇六年六月刊行予定)に詳述した。
- (2) 『風葉和歌集』の引用は、岩波文庫『王朝物語秀歌選 上・下』による。

(3) 注1に同じ。

(みやざき ゆうこ・九州大学大学院博士後期課程)